

「吃音者宣言」の今 ―気持ちの持ち方を変える運動―

A. 「気持ちの持ち方を変える」という運動の持つ意味

全言連の気持ちの持ち方を変えようという主旨の話に繰り返し出会う度に、想起することがあります。もうずっと前の話ですが、中曽根首相が広島原爆病院を訪れ、「病は気からと言いますから、気をしっかりもって頑張ってください。」という「激励」をして、被爆者団体から抗議を受けたという話です。

なぜ、抗議があったのかということ―①「原爆症」という「病」が気をしっかりもつことによって「治る病」ではない、首相に「原爆症」に対する認識不足があったこと。②国家の名において行われた戦争の傷をひきづっている人達に、国の責任者である首相が、その責任を棚上げするような発言であったこと。③「原爆症」の人達が、その「病気」の内容を知らない回りの人達から、「怠け病」として非難を受けて来た歴史があり、「病は気から…」という発言が、そのこととつながったこと。―とまとめ得ます。

この話が、なぜ、全言連の「気持ちの持ち方を変える」という話に重なり合うかと言うと、①の話は、全言連の気持ちの持ち方を変えることによって、吃音者問題が解決できるような主張は、多くの吃音者にとって、自らの実感に合わないこととしてあることに。

②に直接つながる話はないのですが、吃音研究者や親、非吃音者から出される、もっと的確に言えば差別の側にいる人達から出される「提言」が、自分たちが抑圧している当人の一人なのに、そのことを棚上げしているという問題です。全言連の「気持ちの持ち方を変えることによって吃音者問題を解決できるような主張は、非吃音者から出される「吃音なんて気持ちの持ち方の問題なのだ」という吃音者を抑圧する論理とつながるのです。

③の項は、②で先取的に述べてしまいましたが、吃音者には、「どもりは悪いもの、劣ったもの」として、吃りを治せと抑圧されてきた歴史があります。そのことが、吃音そのものを変えるということから、気持ちの持ち方を変えるに変わっただけで、吃音者問題を吃音者当人の「性格」―「気持ちの持ち方」に収束させただけで、吃音者を抑圧する論理であることにかわりがないのです。

話を戻して、①で述べた、「気持ちの持ち方を変える」という運動がどのような有効性があるのか、ということについてコメントしておきます。

全言連が、この方向性に踏み込んで来たことの位置付けとして、「吃音者の体験を整理する中で」出た位置付けだとしています。だが、どのような体験をどのように整理したのか、さっぱり提出されていません。全言連は、いままで、「吃音の治療」ということにあくまで固執して臨床的に試みている人達に、「治るという根拠」を示せと批判してきました。その批判は、自分たちにもそっくり返ってくるはず。「気持ちの持ち方を変えることによって吃音者問題が解決しうる」という根拠を示すべきです。

いくつかの、気持ちの持ち方を変えた人の話を羅列的に、機関紙などで紹介していますが、「吃音が治った」ということと同じように、「吃音者宣言」の生き方に共鳴し、言友会を「卒業」した人が、再び民間の矯正所に通っているという話を聞いたこともあります。

表面的に解決したように見えても、また当人もそう思っている、深層的に見ると、また第三者的に見ると引きづっていることも多々あります。そのようなことも含め、ちゃんとした「整理」をする必要があるのではないのでしょうか？「宣言」の出発点で、アメリカの吃音者団体の役員の方が「成人吃音者で、どもりが治ったという人を私は知らない。」と講演の中で述べたという話がインパクトになったということが、繰り返し出て来ます。その話と同じように、成人吃音者で、吃音者であることを、「あった」ことをひきづっていない人を、私は（狭い交際範囲でしかありませんが）知りません。

今の全言連の「整理」は単に、実感とか、直感の類いのことに過ぎません。そして、その実感一直感が違うという吃音者が多くいて、そこで実感が違うと言いつても、水掛け論に過ぎません。

B. 「気持ちの持ち方を変える」運動の実践〈ワークショツプー〇〇療法〉

全言連は「吃音者宣言」以降、森田療法、様々の心理療法、論理療法、ゲシュタルトセラピー、アサーティブ・トレーニング、竹内敏晴氏のワークショツプ・・・よくもこれだけ思いつくものだと次から次に手を変え品を変え持ち出してきました。

どれだけ自覚的意識一意図的な活動か理解しがたいのですが、第三者的（学的）にとらえると、全言連のやろうとしているのは、ある吃音研究臨床家のやろうとしていることに通じています。

その臨床家は「(吃音の)第1次障害」と「第2次障害」を分け、「第1次障害」は吃音そのもの、「第2次障害」を「第1次障害」からもたらされる「人間関係の障害」と規定しています。そこで、「第1次障害」に関しては、有効な働きかけ法が見いだせないから扱置き、「第2次障害」を取り除くことに力を注ぐとしています。

全言連に「障害」という考え方があるかどうかは分かりません。ただ、〇〇療法ということを取り入れようとする中、無自覚的にせよそのような指向性を読み取れます。

おそらく、そのような指向性を意識化（自覚的意識化）したら、この間のワークも「第2次障害克服」の言友会の独自のプログラムを作る試みとして位置付けられたと考えられます。そして、ちゃんと一つ一つの試みに対してプロジェクトのようなものを作り、整理していく方向に進みえたでしょう。

一つ、一つのことは、それぞれそれらのことを主催する人達にとっては、一生をかけてやっていることです。色々な特性があるとは思いますが、それなりに自分たちのこととして吸収するには、すくなくとも、4～5年の歳月が必要ではないかと思うのですが、ほとんど毎年のように取り組む課題が変わっています。しかも、前の課題は取り組みの成果など何も整理されないまま、プロジェクトも維持されないまま、捨て去られていきます（講演や指導をした人達の怒りをかうのではと心配しているのですが・・・）。

C. 「宣言」実践の混乱

しかも、もちだされる内容に一貫性がないのです。色々な人がいて主張が違うので、順グりに出さざるを得ないということなら、まだ理解できるし、実践的に選捨てられていくこ

となのでしょうか、それがほぼ一人の人を中心に出不されている様子なのです。一体どうなっているのか、さっぱり分かりません。しかも、出されて来る内容が、前の内容と後の内容では、明らかに相いれないような内容だったりします。

ちょっと乱暴な分析をします。このような分析の仕方は後々色々な問題を生じると思うのですが、いつも誤解を生み出さないことを優先させて、分かりにくい文になってことを押さえて、憶断と批判されることを承知で文を進めます。

全言連の持ち出して来ている内容は、あえて大きくわけると、フロンティアスピリットに象徴される西洋的世界観、老荘思想に象徴される東洋的世界観に分け得ます。論理療法は西洋的世界観がはっきりしていますし、他のこともどちらかと言えば西洋的なことです。森田療法や竹内氏のワークなどは東洋的な世界観に裏打ちされています。しかし、それらのことは一貫性がないのです。例えば、あるときは、「あるがままに」ということを主張していたかと思うと、「吃音の矯正」にあくまで固執する人のエネルギーに共鳴したりします。

もっと端的なのは、論理療法の説明で吃音者の非論理性を指摘する件です。要するに、その吃音者は西洋的世界観で今の社会の根本的原理—競争原理に則って、「吃音ということ、就職するときに不利である。」ということを持ち出しているのに、「その会社がだめでも、別の会社がある。」と反論するのです。「どの会社にいるのか、どうでも良い。」というのは、おそらく東洋的世界観の「悟り」に通じることなのでしょうが、この別の世界観に則って話をしているということを意識化していないが故に、自らが非論理的文章の見本のような文を書いてしまったのです。

全言連は大きな流れから見ると、「明るく前向きに生きる」—「吃音の克服」というフロンティアスピリット的な西洋的世界観から「吃音と付き合う」という仏教の十牛図を思わせる東洋的世界観に変遷しているのですが、そのことを自覚化しえていないし、むしろベースは、あいかわらず西洋的世界観の競争原理にあるとしかとらえられません。その競争原理をめぐって基本的にお互いに相いれない東洋的世界観的なことと西洋的世界観的なことを脈絡なく交互に出しています。受け手としては、一体何を主張しようとしているのか、さっぱり分からなくなるのです。

さて、余談になりますが、よく続くものだと関心しているのですが、これから先どのようなことが出てくるのでしょうか。先日、東京の人と話をしていて、もう心理療法的なことは打ち止めになるのでは、何かでるとしたら、哲学か宗教くらいではという話が出ました。竹内さんの東洋的なことをやったので、こんどは西洋的な哲学で、社会変革という道を封じているからマルクスの物象化論は援用しえないし、ポスト構造主義の脱構築（ディスコンストラクション）の概念の援用位ではないか？（もっとも「概念くずし」で似たようなことは書いているかも）その後は、老荘の思想か、仏教の「色即是空、空即是色」の世界でしょうか それとも、一寸方向を違えて、“からだ”論的なところから、野口体操や気孔などに転じていくのでしょうか

D. ワークのもつ本当の意味

では、そもそもこの間のワークということがどのような意味をもっているのでしょうかそれは、何か新しいことを提起していかなければ、言友会の存在意義がなくなるということで、何か新しいことを出すために出す、というところを出されてきたにすぎないことです。

かつて、「宣言」が言友会の最終目標で、そこで、言友会は止まってしまった、という指摘があったそうですが、その指摘は妥当します。「宣言」に共鳴しえたら、会にとどまる意味はありません。社会に出て「宣言」的な生き方を実践するだけです。だから、「宣言」に共鳴しえない人に、どう「宣言」なことをつかむかというためのプログラムを作るかという問題だけです。しかし、そもそもそのようなことは、プログラムのなことで、積み重ねても得られることなのではないでしょうか？そもそも「宣言」の気持ちの持ち方を変えることによって問題が解決できるというようなことに現実味があるとは思えませんが、価値観の転換のようなことは、日常的な実生活の中で、飽和的にふとした気付きのようなこととしてでてくることではないでしょうか 時として、それが結び付くこととして「宣言」（とその実践）との出会いが大きな意味をもつこともあるとは思いますが、……。しかも、それは日常の被差別の現実の中で、揺らぎがもたらされることです。 もっとはっきり言うと、全言連のワークは、吃音者の「障害」（第1次、第2次を含めて）を何とかしたいという思いに支えられて、何か新しいことをやる喜びというようなことと結び付いて、「やるためにやる」というようなこととして続いていることなのです。そもそも、言友会の存在意義は仲間との交流ということに移行し、それだけでは物足りないとして、何かやるということ、しかも目新しいことをやることで自己目的化してでていることではないでしょうか 内容は何でも、皆でやれて、その上「治療」というような「含み」があることなら更により良いというようなことです。

要するに「宣言」の現在的な方向—気持ちの持ち方を変えるという方向づけの破産の隠蔽を（無自覚的意識にせよ）目的として、実は破産の上塗りとして、ワークが存在しているのです。

E. 「気持ちの持ち方を変える」という運動の有効性

さて、今まで全言連の運動の混乱について語って来ましたが、その混乱を過渡としてとらえることについてコメントしておきます。前項で「気持ちの持ち方を変える」という方向づけの破産と断言してしまいましたが、「吃音とつきあう」ということを徹底化させていく、言わば東洋的世界観で統一していく道がのこされていて、破産とまで言い得るかという問題です。そういう中での「気持ちの持ち方を変える」という方向性は実現可能でしょうか？

あながち不可能とも言い得ません。

そのことは競争原理を否定して（実は「降りる」というようなことでしかないのですが）生き得るかということに通じています。

よく、厭世的な生き方をしている人や、出世など無縁として淡々と生きている人に出会いますし、マイホーム主義というような生き方、趣味に生きがいを見いだしてそこに喜びを見いだす人、そのような生き方が一定可能ですし、そのような生き方を選ぶとして、気持ちの持ち方を変え得ます。しかし、そのような生き方が皆に可能でしょうか？競争が強いられる世界で、競争から降りることができるのは、何かしらの「余裕」というようなことが必要になります。

宣言に批判的な人達が、「宣言」を推進する人達は公務員が多い、親方日の丸だから、悠長なことを言われるのだ。」と口にするのを耳にしたことがあります。この発言は単なる誹謗中傷ではなく、一定根拠のあることです。これは競争原理が強いられる度合いというようなことを問題にしているのです。(尤も、公務員から過労死がでる現実では、この指摘も当たらなくなっているのではとも考えられます。)

年齢的などころで、気持ちの持ち方が変わるといふようなことも、競争原理的なとらわれから、競争の行く先が見えて、ある種の諦観のようなとらわれとも言い得ます。

これらの「降りる」といふ生き方の有効性は、どこまで競争原理から降り得るかという問題なのですが、競争原理はこの社会の根本原理ですから、多かれ少なかれとらわれとしまわざるを得ません。とらわれたとらわれ、降りる生き方は、人生の敗北的な観念にとらわれます。そのような観念からも脱し得る、まさに「悟りの世界」に入れる人はいるでしょうか？そのような希有の世界への道を多くの吃音者の進むべき道として提示することは、どのような意味があるのでしょうか？

これまで東洋的世界観への統一といふことで語ってきましたが、もう一つの世界観西洋的世界観への統一といふところから、混乱を逃れうるかといふことについて補足説明しておきます。

これは、実は元来た道へもどるといふことしか意味しません。それは、個性を延ばすなどにより、排除という形での差別から逃れ得るといふ方向での「気持ちの持ち方を変える」といふことで、「吃音の克服」などの表現にあらわれる、あくまでもポジティブに乗りこえようといふ方向です。もう一言言えば、競争原理への積極的参画なのです。この方向については、全言連自体がこの方向から何故転じてきたのか、と問うてみれば明らかになります。もっとも全言連の人達が自覚的意識をもってやっていたら、私としては、無自覚的意識を探るしかありません。

それは、個性を延ばすことによりそれなりに入り込んだ人達が、「吃音者でなければ、もっと・・・」といふような思いにとらわれていた事、個性を延ばしてもそれなりに入り込めなかった(入り込むほどに個性をのばしえなかった)人達にとっては「気持ちの持ち方を変える」といふことが受け入れようもない事、すなわち総体的に、絶対的排除という形態での差別からは逃れえても、相対的排除という形での差別の中にあり、「気持ちの持ち方を変える」といふ方向、この「克服」といふ方向の破綻が明らかになった、といふことがあったのではと思います。

あくまで、私の推測です。これについては、全言連の人達からむしろその転換理由を聞きたいと思っています。

F. まとめー「気持ちの持ちかたを変える方向」の破綻と「新たな」方向性の提示

さて、西洋的世界観と東洋的世界観、とかなり雑な（というよりドグマ的）分け方と、憶断としか言いようもない論理を振り回して来ましたが、ごちゃごちゃになっている「気持ちの持ちかたを変える」という方向の内容がモメント的に明らかにしえたと思います。この運動のベースは、あくまで「明るく前向きに生きる」という吃音者の生き方に学び、取り入れるということにあるのですが、それに接ぎ木して「吃音とつきあう」という方向を提示したものの、水と油のようなまじりあわないこととしてあり、混乱を来しています。その混乱は、そもそもこの方向性の破綻を示しているのではないか、というのが私の主張です。

断っておきますが、「気持ちの持ちかたを変える」ということを否定しているわけではありません。あえて因果論的なことを持ち出しますが、「気持ちの持ちかたを変える」ということを大目的として、それもほとんど唯一の方向として提示することか、と批判しているのです。それはむしろ、活動の中で活動の結果（しかも、「吃りは悪いもの、劣ったもの」という通念を問題にし得る活動の中で、）気持ちが変わるというようなこととしてあるのではと思います。

「気持ち持ちかたを変える」というのは、色々と形を変えた精神主義です。

子供の塾通いが問題になっています。都会ではほとんどの子供が塾通いをしていますが、塾に通うのは、塾に通うのが今の社会システムの中で有利だと思うからで、塾の弊害ということをも主張し、塾通いを止めようと提起しても、ほとんど誰も受け入れません。社会システムそのものに手をかけないかぎり、塾通いの現状を止めることはできません。吃音者の問題も同じで、「吃りを治したい」というのは、今の社会の中で、吃音ということ差別を受けるから、差別から逃れたいということで、「吃りを治したい」と思うのです。「気持ちの持ちかたを変えよ！」と言っても、「吃りが悪いもの、劣ったもの」という社会通念があるところで、どうしてその社会通念と隔絶した（別な一変えた）「気持ち」を持つことができるのでしょうか。

「吃音が軽くなる」ということと同様に、「気持ちが軽くなる」という可能性は否定はしません。そして、現実吃音者問題がすぐに解決しえない中で、過渡的にそのようなこともやっていくということを全面否定しているわけではありません。しかし、彼らが指摘する「吃音のぶり返し」と同じように「気持ちのぶり返し」一揺らぎの中で、どのような意味を持ち得るのでしょうか？

「宣言」は、宣言の実践的方向としての「気持ちの持ちかたを変えることによって吃音者の問題を解決できる」という主張は破産したのです。その認識からしか、新たな、真の吃音者問題を解決する運動ははじまらないのです。

もう紙面がありません。簡単にまとめに入りたいと思います。何故「宣言」は破産して

しまったのか？

それは、「宣言」の中にあつた、社会変革という芽をつぶしてしまったからです。

気持ちの持ち方を変えることによって吃音者問題を解決できるという認識はあやまっているのです。彼らの示す事例は、表層的なところでのとらえ返しにすぎなかったし、自分たちの都合の良いデータだけを選びデフォルメ（変形強調）しているのではないのでしょうか？

彼らには、「吃音者問題とは何か？」というとらえ返しがないのです。紙面がないので、詳しい展開は別稿に譲りますが、吃音者問題とはあらゆる意味で関係性の問題であり、根源的に差別の問題です。その吃音者の受ける差別の形態と他の多くの「重度の」と言われる障害者の受ける差別の形態の違いをとらえきれず、吃音者の受ける差別は気持ちの持ち方を変えることによって克服できるとしたのです。だから、「宣言」の文面にはあつた社会変革の道へ歩み出す芽をつぶし、「吃音の受容」－「障害の受容」が「差別の受容」になってしまったのです。

そもそもその「障害」ということさえ関係性の問題です。差別があるという関係性の変革抜きに、関係性から超絶した、「気持ちの持ち方を変える」などどうしてできるのでしょうか？ いくらかの幅での可能性があるにしろ、それを吃音者総体の方向として位置づけられようもないのです。

そのような観点で「新しい」方向性を提示したいと思います。それは実は「新しい」ことでもなく、「困難」ということで退けた、関係性の変革－「どもりは悪いもの、劣ったもの」という社会通念自体を問題にし、吃音者が生き生きと生き得る社会作りへ踏み出す方向性です。

「困難だから退けた」というのは理解しがたいことです。「困難なこと」は意義ある運動なのです。「困難なこと」を乗り越えていくのが、仲間力を合わせた力ではないでしょうか？そこにこそ、吃音者が集まりをもつ、もってきた意義があるのです。

(完)

<文中、全言連という言い方を多用していますが、厳密に言えば、ほとんど、これまでの全言連の指導者と称されていた人達を指しています>

(全言連への対話シリーズ 『吃コミ』 への投稿)

□